

Script Samurai Counseling
Pilot – “Outflow determines Inflow”
ケース No.3: “不平等に扱われる原因は…”

Cast List

登場人物:レギュラー

Madam Maya (F.カウンセラー)

Satoru (マダムの弟子／ボディーガード／付き人)

David(弁護士)

Robert Sebastian (執事)

第三話登場人物

マイラ Boccherini (actress)

Alex (マイラのマネージャー)

Ethan(男優)

映画監督

エディ(マイラの長兄)

トニー(マイラの次兄)

マイラの父母

ACT ONE

撮影ロケ現場。

みんなが大騒ぎでセットを作ったり、テントを張ったりしている。

マイラ、自分のテントが遅いとか、椅子がないとか、いろいろと文句を言っている。同じ出演者であるイーサンが、見かねて自分のまわりの用意をしているスタッフに、彼女のほうを手伝ってやれと言っている。そして、彼女に自分専用の椅子を持ってきてやる。

イーサン

マイラ、主役様に椅子を持ってきたよ。

マイラ

あら、ありがと。

(たいしてありがたそうではない。今頃持ってきたか、というような様子。遠慮なくどかりと座り、まだイライラしている様子。その横顔をイーサンは黙ってみている)

別の若い男性出演者
マイラ、冷たいジュースをもらってきたよ。

マイラ

ありがと。

(相手の顔をろくに見ようとしない。あきらかに馬鹿にしている様子。イーサンと若い男性出演者は顔を見合わせている)

(撮影が始まり、進行している様子)

マイラがテントで待機中、監督はパソコンのメールでなにかのやり取りをしているようす。それを横目で見ている。大道具のセットが崩れ、監督が慌てて様子を見に行った時に、パソコンを開いたままだったので、マイラはこっそりと内容を盗み見た。

マイラ

な、なにこれ…！？

(内容を見て、めらめらと目に怒りの色が出る)

END OF ACT ONE

ACT TWO

INT. デービッドの弁護士事務所。弁護士事務所らしくない和風のインテリア。デービッドとジョンが差し向かいに置かれたカウチに座っている。

マイラ

(髪の毛を指でクルクルといじくりながら、居心地が悪そうにしている)…とにかく、マネージャーのアレックスがここに行けというから来たのよ。アレックスだって、あなたのことを人から聞いたただけだって言うの。とりあえず来たけど、なにをどう言っているかわからないわ。(きょろきょろと室内を見て、胡散臭そうに思っている)

デービッド

私は一応弁護士ですから、なにかトラブルがあったときにだけ、お客様は私に会いにいらっしゃるわけですが…。どんなトラブルがあったのですかな？

マイラ

秘密は守ってもらえるわよね？ トラブルというか…すごく頭に来たの。だから、何とかして訴えてやりたいって思ったんだけど、私の評判が傷つくのも嫌だし。でも、このままじゃどうにも収まらないわ！

それでちょっと暴れていたら、アレックスが…。

デービッド

(マイラを遮って、老眼鏡から目を上げて) 暴れた？ どんなふうに？

マイラ

(ばつが悪そうに) ソファの上で、ソファをパンチしていただけよ。そしたら、そのはずみで上から絵が落ちてきて…。その額で私が背中にケガを…。ま、大したことはなかったのだけど。

デービッド

それはまた、大変な怒りようですな。で、あなたのご職業は？

マイラ

(びっくりしたように) あ、あたしは女優よ！ (と腹を立てた様子で腕を組みなおす)

デービッド

(わざと驚いたように) これは失礼しました。私は世間に疎いものですから…。

マイラ

(プライドが傷ついて、少し顔を赤らめる) 世間に疎いって言ったって…あなた、一応弁護士でしょ。

デービッド

はい。一応ね。で、アレックスがどうしたんです？

マイラ

…ええと、アレックスがあなたのところに行けば、根本的に解決できるかもと言ったのよ。私は裁判を起こすって言ったんだけど、アレックスは、こんなに興奮して暴れるくらいなら裁判なんかしたら、もっと興奮するからやめたほうがいいって。それに、仕事を失ったら元も子もないって言うのよ。ま、彼の言うこともわかるわ。この世界では、監督に嫌われたら仕事がうまくいかないし…ああ、裁判をした相手は映画会社なのよ。つまり、私が女優の仕事をする限り、映画会社と争うのはよくないわ。

でも、こんな、映画会社に裏切られた気分で仕事をするのは嫌なのよ。

デービッド

それはごもつともですな。

マイラ

で、アレックスが行けと言ったのがあなたで、…弁護士だというわけ。訳が分からないわ。

裁判はやめとけと言ったくせに。なにを考えているのかしら、彼？

デービッド

いやいや、ベストなチョイスだと思いますよ。まず、何があったのか、教えてください。

マイラ

(溜息をついて、斜めにうつむきながら)いいわ…。

私は女優になって今8年目なの。3年くらい前から、良い仕事に恵まれて、テレビドラマで主役ももらっているわ。今、ワンシーズンを取り終えて、次の契約をしようとしているところなのよ。でも、いろんなことから、相手役の俳優が…知っているでしょ、イーサン・ウェーバーっていう役者…。

デービッド

(顔を輝かせて)おお、知っていますよ！

マイラ

(むっとして顔を上げてデービッドを見る。うんざりした様子で、また斜めにうつむいて)

デービッド

(コホンと咳払いして)失礼。で、イーサンがどうしたんですか？

マイラ

彼のギャラは、なんと、私の3倍だったのよ！(顔を上げて、デービッドをにらむように)
私と同じくらいのセリフ量で、私と同じくらいの重要度の役よ。でも、主役はあくまでも私よ。
それなのに、私の3倍だなんて、あり得る？

デービッド

なるほど。でも、彼のほうがキャリアがあるとか？

マイラ

そんなこと、ないわ。キャリアで言えば、私だって長いわよ。それに、私には多くのファンがいるし、

私が主役だから見てくれているファンも多いのよ。だから、彼が私の3倍のギャラを取るなんて、そんなのおかしいわ。不平等よ。これは、女性差別なのよ！

デービッド

なるほど～。女性差別なのですか…(おもしろそうに)

マイラ

(興奮して)そう、差別にほかならないわ！

いったいどんな理由があって、私が彼よりも3分の1以下しかもらえないの？ 意味がわからない。…でも、アレックスが言うの。ここで騒いだら、会社側は、次のシーズンは主役をほかの女優に変え
ると言い出すかもしれないから、騒ぐなって。こんなの理不尽でしょ。

確かに、私の人気はまだ確立しているとは言えないわ。シーズン1しか撮っていないから、まだ主役
を変えることもありえないわけじゃない。でも、立場が弱いからって、我慢するしかないなんて、そん
なのおかしいわよね？(デービッドにつめよる)

デービッド

まあ、そうですね…。

マイラ

(マイラ、あきれて腕を組んで)あなた、本当に弁護士なの？

弁護士ならば、こんなときこういうものよ。(立ち上がってオーバーアクションで弁護士を演じる)
「もちろんですとも！ ここで泣き寝入りなんていけません！ 徹底的に戦うべきです。私にお任せ
ください、絶対に勝って見せます！ あんな悪徳映画会社をのさばらせてはいけません。
ええ！ これは正義ですとも！ あなたのやろうとしていることは全女性のためになることです！」

デービッド

さすが女優だ！ 真に迫っていますね！(拍手する)

マイラ

(ハッと我に返って…。ソファに戻って)あなたはこんなことを言う弁護士じゃないというわけね。で、
いったいあなたは何をしてくださるの？

デービッド

(にやりと笑って…)私がお手伝いするのは、あなたが不平等な世界から抜け出すお手伝いをする
ことなのですよ。

マイラ

不平等な世界から抜け出す？

デービッド

そう、それこそが本当の意味での勝利です。映画会社に勝つことではなく、あなたがあなたの人生の勝利者になることです。

マイラ

(よくわからないというような表情で目を大きく開いて首をかしげる)

デービッド

(名刺を取り出して) 私の役割は、お客様がここに紹介するのがふさわしいかどうかを見極めることです。あなたは合格ですよ。(名刺をマイラに差し出す)

マイラ

(名刺を受け取って)

マダム・マウ？ 誰なの？ 霊能力者かなにか？

(怪訝そうに裏返す。裏には、Theory of an Advanced World と書いてある)

デービッド

(ニマリとして) いえ。ライフカウンセラーのようなものですよ。と言っても、あなたの怒りを癒す、というのではなく、あなたの問題を根本的に解決する、という仕事をしています。弁護士の私が言うのもなんですが、裁判よりもずっと役に立ちますよ…。ぜひお訪ねください。…ベルエアです。マダムは素晴らしい家にお住まいですよ。

マイラ

(きょとんとして顔で名刺をもう一度見て) ベルエア？ ま、悪くないわね。(いたずらっぽくニコリとする)

END ACT TWO

ACT THREE

EXT. ベルエアの豪邸の玄関。

マイラ、呼び出しボタンを押してから、荘厳なフロント・ヤードを見回して感心する。

ドアが開き、執事が現れる。

執 事

マイラ・ボスケリーニ様ですね。こちらです。奥さまがお待ちです。

INT. りっぱな玄関ホール、シャンデリア、赤いカーペットの敷かれた階段。真ん中に美しい桜の盆栽。奥田玄宗の大きな日本画(桜)。ゴージャスだがどこかエキゾチックなロビー。
マイラ、きょろきょろして、絵に近寄ってみたり、盆栽に顔を近づけてみたりしている。赤いらせん階段を見上げて、

マイラ

(とてもうれしそうに)私、こんなところに住んでみたかったの！ そうよ！ 女優になったのだって、こんな生活をしてみたかったからだわ！

執事

恐れ入りますが、ここからは靴をお脱ぎください。

マイラ

え、靴を脱ぐの？ (自分の編み上げのブーツを見る)

執事

(ブーツを見て)こちらにどうぞ。(廊下の椅子に案内し、おしゃれな室内履きを差し出す)
これにお履き替えください。

マイラ

しょうがないわね。了解よ。(観念して靴を履き替え始める)

執 事

(マイラに椅子を勧めながら)
本日、マダムは不在です。

マイラ

(驚いて)えっ、そんな！

執事

ご安心ください。マダムの弟子、サトルが代わりにご指導いたします。

マイラ

サト、サト…？ え、どういうことなの？…(狐につままれたような顔)

執事は一礼して去り、いつの間にか目の前にサムライ風の男が現れる。

サトル

(腕を組んだまま)俺がサトルだ。俺がお相手をする。

マイラ、きょんとしている。

サトル、かまわずにすたすたと前を歩く。

マイラ、椅子のそばに立って止まったまま。

サトル

(マイラがついてこないなので、振り向いて)こっちだ。さっさとついてこい。迷子になるぞ！

マイラ、むかつくが、とりあえずついていく。

マダムの洋間。板張りで、テーブルと椅子2脚。安土桃山風。ふすまの上には3匹のサルの欄間。

サトル

ここに座れ。

マイラ、椅子を引いてくれるのを待っている。

サトル

どうした、座れ。

マイラ

(むかつきながら小声でつぶやく)あなたって…山ザル？

(自分で椅子を引いて座る)

サトル、気が付かないフリをして、ポットから自分でお茶を入れ、自分の分だけ持ってきた。そして、
自分だけお茶を飲んでいる。

マイラ、それを見て怪訝そう。

マイラ

あの…。

サトル

なんだ。

マイラ

私にお茶を入れてくれないの？

サトル

なぜ俺がお前にお茶を入れなきゃならんのだ。

マイラ

え？(マイラ、心底驚いたように目を見開く)

サトル

お前はマダムにいくら金を支払った？

マイラ

えっ？ …なにも支払っていないわよ。…だって、タダだって聞いたわ。

サトル

そうだ。タダだ。マダムはセッションに金をとらない。
つまり、お前は、こちらの好意でここにいる。

マイラ

は、はあ…(訳が分からないという顔)

サトル

こちらの好意でここにいるお前に、なぜ俺がお茶をいけなくてはならんのだ。
本来、お前が師である俺に茶を入れるべきなのだ。
飲みたければ、自分で勝手に淹れろ。紅茶もコーヒーもある。好きなものを飲め。

マイラ

(あきれて)わかったわよ！

立ち上がり、自分でカップにコーヒーを注ぐ。そして、自分で椅子をひいて座る。

サトル

良いか、これからお前にはゲームをしてもらう。そのゲームをクリアすることが、今日の課題だ。

マイラ

はあ～？

マイラの前で、テーブルの一部が自動で開いて、中からスクリーンが出てくる。マイラ、意外なハイテクに驚く。スクリーンからTAWのロゴが現れて、次に文字が現れる。機械的な声をする。

スクリーンの声

「あなたはこれから30年間、ある惑星で生活することになりました。
最初に、必要なものを買わなければいけません。予算は100,000ドルです。
その予算内で、買い物リストから買い物をしてください。制限時間は 10 分です」

次に買い物リストが現れ、タイマーがチッチッと音を立て始める。

マイラ

な、なに、これ？ なんのゲームなの。知能テストなの？

サトル

まあ、そんなものだ。

良いか、ちゃんとよく考えて買い物をせよ。買い物が終われば、お前の評価点が出る。それが30以上ならば合格だ。さあ、がんばれ。

マイラ

(フフンと笑って) なんだかわからないけど…こんな簡単なゲーム、簡単よ。
(リストを見て選び始める)

画面のリストがアップで映し出される。

1. ダイヤモンドのネックレス 10,000ドル
2. ディオールやアルマーニを着る 10,000ドル
3. ピアジェの時計 30,000ドル
4. プール付きの豪邸 500,000ドル
5. ハンサムでセックスのうまいパートナー 300,000ドル
6. キャビアやロブスターなどの豪華な食材 20,000ドル

.....

28. 健康によい食事 1,000ドル

29. デニムのジーンズ、パジャマなどの普段着 1,000ドル

30. 医療施設利用費 3,000ドル

.....

マイラ、選んだものをクリックすると、自動的に計算され、合計が出る。

あっという間に予算オーバーとなり、ビープ音が鳴る。

マイラ

な、なによ、これ。全然予算が足りないわよ。

慌てて選びなおそうとするマイラ

別のサウンド

サトル

時間切れた。

スクリーンからパンパカパーンというような音楽が流れる。

そして、8という数字が表れる。

機械の声

あなたは8年目に死にました。

マイラ

(驚いて) な…なに、これ？

サトル

つまり、お前の買い物の内容では、お前は飢えるか病気になるかで、8年目には死ぬということだ。

マイラ

えっ、なんで？

サトル

お前の買い物の仕方が悪い。生活に必要なものばかり買って、生活に必要なものを用意しなかったから、8年で死んだ。30年分の買い物なのだから、30年生きなくては負けだ。

マイラ

負け？

(負け、という言葉がぐさりと来て)じゃ、もう一回やらせて！

サトル

クリアするまでやれ。

マイラ、ゲームをやり直す。何度もクリックする。そのうちに真剣な表情になる。ビープ音が何度もなる。パンパカバン音楽が流れ、点数が出る。それ繰り返す。

15,

18

21

…となかなか30点が出ない。

サトル

へたくそめ！ 俺は一度でクリアできたぞ！

マイラ、悔しそうに続けている。

マイラの心の声

(あたしったら、なんでこんなことをやっているのかしら？)

マイラ

ほら！（サトルに得意そうに振り向いて）今度こそ、25点が出たわ！
もういいでしょ。5年くらい短くたって。美人薄命って言うし。もう飽きたわよ、このゲーム。

サトル

ふん。なぜおまえがなかなかクリアできないか、わかるか？

マイラ

そんなのすぐわかるわよ。予算が少なすぎるのよ！

サトル

愚か者。そうではない。お前が欲張りすぎるからだ。

マイラ

だ、だって！ このリスト、ほしいものが先に出てきて、必要なものが後から出てくるんだもの！

サトル

ディズニーランドのレストランで食事したことはあるか？

マイラ

はい？

サトル

自分で好きな皿をお盆に乗せていくシステムだ。なんと、一番最初に並べられている皿は、デザートだ。愚か者どもは、デザートに魅せられて、ついついデザートを取る。普段はデザートなど食べない奴もな。そして、まんまと罠にはまり、予算オーバーの食事をする。これがサルの心を持つ者たちへの戦略というものだ。

マイラ

私がサルだっていうの…？

サトル

お前の心はまだまだサルに等しい。だから、欲望が抑えられず、必要なものが見極められない。しかし、実際には生きなければならないから、必要なものをそろえるざるを得ない。すると、予算オーバーだ。これがどういうことかわかるか？

マイラ

(サトルをバカにしながら、両手を広げて)
ワカリマセン。

サトル

借金ができるということだ。
つまり、お前が10,000ドルの仕事をしたとしても、借金があるので、7,000しかもらえないということだ。

マイラ

(ちょっとハッとしたように)…それと、私が差別されていることに関係があるってこと？

サトル

借金をしたのは自分。それを取り立てるのは、自然の法則だ。差別ではない。

マイラ

よくわからないわよ〜。もっとわかりやすく言ってくれない？

サトル

(目を閉じて腕を組み)あとは自分で考えろ！

マイラ

(怒って)なによ！ もう、ばかばかしいったら。(立ち上がる)
レディースルームはどこ？

サトル

案内してやろう。

(立ち上がって、扉の前に立つ。そのまま扉を開けずに立っている。マイラ、横で彼が扉を開けるのを待っているが、いつまでも開けないので、二人で6秒、扉の前にとまっている)

マイラ

何をしているのよ。さっさと扉を開けてよ。

サトル

馬鹿者。扉を開けるのはお前の役目だろう。ここでは、俺が師なのだ。師のために扉を開けよ。

マイラ

あなたね！ 女性が一緒の時は、男性は女性に扉を開けてやるものよ！

サトル

そんな風習は知らん！ 俺は日本男児だ。なぜ師である俺が、俺とマダムの好意でタダでここにいろお前のために扉を開けるのだ。うだうだ言わずにさっさと師のために扉を開けろ！

マイラ

んも〜！！

わかったわよ。好意、好意って、うるさいわね！

(マイラ、少し重い扉を開ける。そして、やけくそで)
どうぞ、先生様、お通りくださいませ！

サトル

よろしい。(えらそうに)

END ACT THREE

ACT FOUR

EXT. マイラの自宅の豪華なマンション。夕方。広々として、突飛なデザインの椅子やモダンアートなどが壁に掛けられている。そして、小物やキラキラしたものがあちこちに飾られている。ごちゃごちゃした感じ。マイラはダイニングテーブルに座って、物思いにふけている。そこへチャイムがなり、チャリとドアを見るが、そのまま考え事をしている。すると、勝手にドアを開けてアレックスがやってくる。ゲイ風の女っぽい黒人の男。黒いスリムな上下と柄物の小さなベストを着ている。小さな袋と大きな袋を持っている。腰で大量の鍵がじゃらじゃらしている。

アレックス

どうしたのよ、マイラ。デービッドのところに行ってから、おとなしくなったのはいいけど、あれから時々、心ここにあらずね。ほら、あなたの好きなプラネットカフェのラムサンドを買ってきたわよ。

小さな袋を渡す。マイラ、黙って受け取る。そして、包みを開いて一口かじる。

アレックス

次回のシーズン2も、主役は正式にあなたに決まったわよ。さっき、契約書にサインしてきたの。お祝いよ！

(大きな袋からシャンパンを取り出す)

マイラ

そう。よかったわ。あの仕事を失うわけにはいかないから、裁判しなくて正解ね…。

アレックス

(シャンパンを開けながら)それにしては元気がないのね。

マイラ

そりゃそうでしょ。だってギャラはほとんど変わらないもの。

アレックス

何言っているのよ。あたしがちゃんと交渉して、1, 3倍になったじゃないの。

(ポンッとふたが開く音がする)

グラス、グラスと…。(アレックス、キッチンへ)

マイラ

(アレックスが働く姿を見ながら) そうね。ごめんなさい、アレックス。あなたのおかげだわ。そう、少しだけギャラが上がったわ。ありがとう。

アレックス、グラスを2つ用意して、シャンパンを注ぐ。

アレックス

もっと景気のいい顔をしなさいよ。怒りで興奮しなくなったのはいいけど、元気もなくなっちゃったわね。あの弁護士に何を言われたのよ？

マイラ

弁護士のせいじゃないわ。彼が紹介したマダム・マウという人にとところに行ったのよ。ベルエアに住んでいるというから、興味がわいて行ってみたの。

アレックス

(そばに座って、乾杯を促す。チンという音) で、そのマダムなんとかに何か言われたの？

マイラ

いいえ。なんにも。マダムはいなかったわ。

アレックス

じれったいわね。じゃ、何があったのよ？ マネージャーとしては、聞いておく義務があるわ。

マイラ

ゲームをしたのよ。そして、生意気なサムライみたいな男がいたわ。その男に監視されて、そのゲームをクリアせよって言われたの。
(サンドイッチをまた一口食べる)

アレックス

テレビゲーム？ どんなゲーム？

マイラ

買い物するのよ。アクセサリーとか、家とか。

アレックス

マダムって、ファイナルシャルプランナーなの？ あなたのギャラが少ないなら、それをどう使うかを
教えてくれるってわけ？

マイラ

違うわよ。そうじゃないの。ゲームの結果、私は欲張りで、ほしいものを先に手に入れようとするから
うまくいかないんだって言われたの。…でもね、それはどうでもいいのよ。
あのサムライ男がむかつくの。

アレックス

(シャンパングラスを口に運ぼうとして、手を止める)はあん？ むかつくというわりにはおとなしいじ
ゃない。

マイラ

そいつは、レディファーストなんかしたこっちゃないというようなやつで、自分のために扉を開けろ
とか、お茶は自分で入れろとか、本当はお前が俺のお茶を入れるべきだとか…。とにかくむかつく
のよ。

アレックス

で、なんでおとなしいの？ いつものマイラらしくないわね。いつものマイラなら、完全に切れている
わよ。

マイラ

そうよね。あんな扱い、生まれて初めてだった。(フウとため息)。それなのに、怒る気になれない
の。まるで、なんだか別の人生を生きたみたいだった。ほんの少しね…。

アレックス

ふうん。逆に女らしくなったってわけ？ わかるわ。女心は複雑よね…。

マイラ

やめてよ。そんなんじゃないわ。なんだか、お父さんに怒られたみたいな気分なのよ。

アレックス

ふうん…？ あんた、マゾだったかしら？

(ふたりで夕空を見上げる)

END ACT FOUR

ACT FIVE

EXT. マダムの洋間。マイラ、再びマダムを待っている。マダム、姿を現す。

マダム

こんにちは。マイラ。初めまして。私がマダム・マウです。先日は失礼しましたね。ゲームはお役に
立ったかしら？

マイラ、マダムの印象が想像していたもの(頑固そうなアジア人のおばあさん)とまったく違って
いて、美しいので、ちょっとショックを受けるが、すぐに平常心に戻り、

マイラ

マダム。あのゲームはどういう意味があるんですか？

マダム

あなたはなにかつかんだのかしら？

マイラ

サトル…は、私が欲張りだって言っていたわ。

マダム

他にもまだ、体験したことがあるでしょ？

(フフフと笑いながら)

…ところで、あなたは男の兄弟がいるかしら？

マイラ

ええ。私は兄が二人います。三人兄妹です。

マダム

そう。……あなたは今、映画会社があなたを差別していることに腹を立てているのよね。
では、その原因を探りましょう。そして、根本的に解決しましょう。

マイラ

根本的に解決するって、どういうことなんですか？

マダム

つまり、二度と差別を受けないようにするということよ。

マイラ

二度と？

マダム

そう、一生のあいだ、二度と。

マイラ

デービッドもそんなことを言っていたけど、そんなの、わからないと思うわ。私が差別を受けたくない
と思っても、相手が差別するかもしれない。それが仕事の相手ならば、逃げられない。どうやっ
て、二度と差別を受けないようになれるというんですか？

マダム

それを私はあなたに教えるの。それが私の仕事なのよ。その方法を知りたい？

マイラ

えっ、…知りたいですけど…でも、そんな方法は、あるはずが…。

マダム

あら、知りたくないみたいね。あなたは差別が存在する世界に生きたいのね？

マイラ

まさか！ 誰だって差別が存在する世界に生きるのは嫌なはずだわ。

マダム

じゃ、あなたは差別のない世界に生きたいということね？

マイラ

そうです。そうでありがたいわ。

マダム

あなたは今、差別のある世界に生きている。あなたの知っている範囲の理屈では、この世界は差別が当たり前のようにある場所なのよね？ だったら、この世界の理屈を捨てなさい。あなたが信じているこの世界の理屈は、あなたが差別のない世界に生きるためには役に立たないわ。だから、ひとまず、今までの常識やあなたの理屈を捨てることよ。

マイラ

はあ…。で、どうやって…？？

マダム

あとは私に任せて。

これから、誘導瞑想をするの。よく心理カウンセラーがする催眠療法みたいなものね。子どものころに戻って、再体験をするというもの。いいかしら？

マイラ

(なんだ、つまらないという表情をしながら)
わかりました。お任せします。

マダム

では、ゆったりと座って…そして、目を閉じて…

マイラ、目を閉じる。

マダム (V.O.)

では、あなたがギャラのことを聞いて、とても腹を立てたシーンへ戻りましょう。

マイラの目を閉じた顔にオーバーラップして、過去のシーンが浮かぶ。
マイラがギャラのことを聞いて、怒り狂ってクッションを何度もソファに投げつけている。

マダム (V.O.)

あなたはとても腹を立てているんですね。

マイラ(V.O.)

そうです。私が主演なのに、どうして私のギャラが三分の一なの！？　こんなの絶対におかしいわ！！

マダム (V.O.)

では、この怒りとよく似た怒りを感じた、六歳以下の子どものころに戻ってみましょう。

マイラ(V.O.)

六歳以下？

マイラが子どもころのシーン。家族が全員いる。父親が出張から帰ってきたシーン。なぜか、六歳のマイラは大泣きをしている。

マダム (V.O.)

あなたはなにを泣いているんですか？

マイラ(V.O.)

私は、すごく怒っていたんです。そして、ソファの上で暴れていました。あんまり暴れたので、上から壁にかけていた額が落ちてきて、私は額で肩をケガしたわ。あら、今と同じね。ケガは大したことはないけど、悔しいやら、痛かったやらで、大泣きをしているの。それを兄たちがあきれてみているの。それがまた悔しいの。お父さんは怒ってる。なんで私がお父さんに怒られるの？　お母さんは助けに来てくれないわ。本当に悔しい。なんでこんな目に遭うのかしら。

マダム (V.O.)

いったい何があったのですか？

マイラ(V.O.)

泣いている原因？

マダム (V.O.)

そうです。あなたがとても腹を立てて泣く原因がわかるシーンへ戻りましょう。

場面が変わり、父親が家に戻ってきたばかりで、子どもたちにプレゼントをあげている。まず一番上の兄（10歳）に高価な犬のロボットを上げた。二番目の兄（8歳）にゲームソフトをあげている。二人とも歓声をあげている。そして、マイラは高価な箱入りのお菓子をもっている。

マイラ(V.0.)

……お父さんがお土産を買ってきてくれたのだけど、私にはただのお菓子で、兄たちにはとても高価なものを上げたの。それで、私が怒っているの。特に、一番上の兄がもらった犬のロボットは 300 ドルもするのよ。私のお菓子なんか、30 ドルもしないわ。私も犬のロボットがほしいと思っていたのに、私には買わずに兄に与えたの。それで、私が「ずるいわ！エディ。私にちょうだい！私がほしかったのよ！」と言ったら、エディは「やだよ～！女の子にはロボットなんかいないだろう！」って言ったの。それで私がお父さんに、「お父さん、私にも犬のロボットを買ってよ！」って言ったけど、お父さんは「お前にはいないよ」と言ったから、私は本気で腹を立てて、ソファで飛び跳ねて怒っていたの。

マダム (V.0.)

そのとき、あなたはどう感じていたんですか？

マイラ(V.0.)

私は女の子だからバカにされるんだ。私は女の子だから、価値あるものを与えられないんだ。…って思ったわ。

マダム (V.0.)

女の子だから差別されたと感じたのね。ほかにもこんな思い出はあるかしら？

マイラ(V.0.)

あるわ。いつだってそうだった。母は、兄にはいつだって食べきれないほどの肉を与えていくせに、私には「太るからやめなさい」とか、兄たちには野球の練習から帰ってきたとき、母はコーラを与えるくせに、私にはくれなかった。それから、兄たちには16歳から車を与えたのに、私には車は危ないからダメだとか。

大学に行こうとした時だって、「あなたは奨学金が出ないと、大学には行かせられないわ。でも、この成績じゃ難しいわね」って言ったのよ。兄二人にはなにも言わず、大学に行く費用を用意したわ。

悔しい…。いつも私はちゃんと与えてもらえない…。

(兄たちが肉をほおばっているところを、恨めしそうな目で見ている自分。兄たちが車を自由に乗り回しているのに、自分は兄に乘せてと頼んでいる屈辱的なシーン。母親がダイニングテーブルで自分の成績のことを話しているシーン)

マダム (V.0.)

はい。では、お土産のシーンに戻しましょう。

あなたは今、お父さんがお土産を配る前に戻ります。

そして、お父さんの顔をよく見ます。それから、お父さんの体の中に入ってみましょう。

(大人のマイラが、子どもたちのシーンを傍観し、それから父親の体に後ろから入る)

マダム (V.0.)

あなたは今、この子たちの父親です。この子たちのことをどう思いますか？

マイラ(V.0.)

(父親として) みんなかわいいです。1 か月ぶりに家に帰ったので、とても会いたかったです。

マダム (V.0.)

あなたは一番上の子に高価なものを買いましたね。それはなぜですか？

マイラ(V.0.)

(父親として) エディは私が留守をしている間、母親をととてもよく手伝ったんです。私がいない間、男として、母親を守る役割をしてくれました。それをほめたかったんです。それに、勉強もよくできて、本当に良い息子です。

(夜、敷地内の納屋で作業をしようとしている母親のそばにいて、エディがまわりを見まわして安全を確かめている様子)

マダム

あなたはマイラにはお菓子を買いしましたね。それはどうしてですか？

マイラ(V.0.)

(父親として) 私は子どもを平等に愛しています。しかし、女の子には正直、何を買っていいのかわかりません。マイラはきれいなお菓子が好きだから、色とりどりのゼリーを上げたら、きっと喜ぶと思ったんです。それに、まだ 6 歳ですから、高価なものを買っても価値がわかりません。おいしいものならばわかるだろうと思いました。

(父親が出張先でお土産を探している様子)

マダム (V.0.)

あなたはとても平等に考える人なんですね。

マイラ(V.0.)

(父親として) そうです。エディもトニーも、働きに応じてご褒美を上げています。それは、この子たちにはわかっています。

(二人の息子がマイラの世話をしたり、母親の手伝いをしているシーン)

マダム (V.0.)

マイラは、兄たちのほうが肉が多く与えられたと言っています。食べ物でも兄たちのほうが大切にされていると思っていますが、あなたはどう思いますか？

(みんなで食事をしているシーン。それを見守る父親)

マイラ(V.0.)

(父親として)マイラは、こんなに小さいころから、人前に立つのが好きで、おしゃれをするのが好きでした。だから、美しい子でいてほしかったんです。だから、私も妻も、太らせないようにと気を配りました。息子たちは、スポーツをしていたので、運動量があるから、多少肉を食べさせても、太らないのです。今、彼女が女優になってくれて、うれしいです。太る体質になってしまったら困りますからね。

マダム (V.0.)

あなたの娘は今、とても有名な女優になりました。それをどう思いますか？

(マイラが女優として華やかに活動しているシーン)

マイラ(V.0.)

(父親として) うれしいです。誇らしいです。マイラには幸せになってほしいです。誰よりも輝いていてほしいです。

マダム (V.0.)

では、抱きしめてあげてください。

マイラ(V.0.)

(父親として) はい。

(6歳のマイラを抱きしめる)

子どものマイラが嬉しそうにしているシーン。

マダム (V.O.)

では、大人の自分に戻りましょう。

(回想シーンが終わって、マイラの目を閉じた顔)

マダム

あなたは今、自分が不平等を願っていたことがわかりましたか？

マイラ

(目を閉じたまま驚いて) えっ、私がですか？

マダム

そうです。あなたは子どものころ、自分が不当に扱われていると思っていましたが、あなたが「平等」と思っているものそのものが、実は不平等です。

マイラ

え…、どういうことでしょう。

マダム (V.O.)

あなたのお父さまは、子どもたちがどんな働きをしたかを考えて贈り物をしました。一番上の兄は、良く母親を手伝い、よく勉強をし、スポーツもしていました。だから、父親はそこを褒美を上げたのですよね。

(再び回想シーン)

マイラ(V.O.)

そうです。私がそう言いましたよね。父親として。

マダム (V.O.)

つまり、あなたは自分が兄たちと同じ働きをしていないのに、同じものを欲しいとわがまを言っていたのです。実力の伴わない平等は、不平等です。それから、あなたはいつも、兄たちに見守られ、兄たちに世話をされていましたね。

(兄たちがマイラの両側に立って、手をつないで歩いているシーン)

マイラ(V.O.)

そうです。いつも兄たちが私を助けてくれていました。
私が何かを落としたら、拾ってくれましたし、私が転んだら、起こしてくれたり、痛いところを撫でてくれたりしました。

マダム (V.0.)

それは、あなたが一番下の女の子だからですね。あなたが一番下の立場にいるならば保護されますが、その分、あなたは支払いが必要です。

マイラ(V.0.)

えっ、支払いですか？

マダム (V.0.)

そうです。あなたは兄たちに世話をされ、助けてもらっていたならば、あなたは兄たちを自分よりも上に置かなくてははいけません。そして、兄たちを尊敬すべきです。それなのに、兄たちを尊敬せず、自分が一番大切にされて当たり前とっていました。だから、エディがすばらしい贈り物をもらったときに、妬ましく思い、エディから奪おうとしました。自分は一番大切な存在で、なんでも手に入れる権利があると勘違いしていたのです。

マイラ(V.0.)

それがいけないのですか…。

マダム (V.0.)

あなたが願っていた理想の世界は、反対側から見ると、とても不平等な世界です。

兄の立場で考えてみてください。

なにかの働きをしても、ちゃんと報酬が得られない。

何の働きもしない人に、報酬を奪われる。

この世界は平等ではない。

(ロボットを手をしているのに、マイラに貸さないと泣き止まないのも、しぶしぶ貸しているエディの姿)

これがあなたの頭の中の回路として成立したのです。

つまり、大人になったら、あなたはこの回路で周りから扱われます。

そして、あなたの頭の中でこの法則が回っています。

この世界は平等ではない。

この世界は平等ではない。

(この言葉の音がマイラの頭でこだましているシーン)

この世界は、あなたの思考が作り出している世界です。
こうして、あなたは平等ではない世界に生きることになるのです。

マイラ

え、そうなのですか？ 私の思考が作り出している世界？

マダム

不平等な世界は困りますよね？ だから、あなたが
ちゃんと子どもの自分に教えてください。
この世界の平等というルールを守りなさい、と。

マイラ

えっ…私は今まで、まわりが不平等なのだと思ってきたわ。
逆だってことなの？

マダム

そうです。世界が不平等だと思っているのは、自分を特別に扱ってもらおうとしている人です。誰が見てもあなたに価値があるならば、あなたは当然、特別に扱われます。でも、価値がなければ、あなたを特別に扱うのは不平等となります。

マイラ

でも、私は女優よ。だから、まわりが特別に扱ってくれるのは当然でしょ？

マダム

ファンに対しては、あなたは価値があります。でも、監督や同じクラスの俳優仲間にとってはどうかしら？ あなたは同じ価値のある仲間や上司たちにも、特別に扱われたいの？ だとしたら、それはあなたがエディやトニーにしてもらったようにされたいだけね。家族はあなたが小さいからしてくれたけど、大人になったら、それは通用しないのよ。

(しばらく黙っている)

いつの間にか、ロケ現場で、監督として自分を見ている。いつも文句ばかりで忍耐が足りず、自分よりも誰かが優先されているのを見ると、すぐに腹を立てている様子を観察している。

マイラ

マダム、この前のゲームの意味がわかりました。私は欲張りでした。人が持っているものが欲しくなるんです。私が持っていないものを持っている人を見ると、悔しくて妬ましくなるから、先に奪ってしまいたいんです。ものだけでなく、誰かが私以上に大切にされているのを見ると、妬ましいんです。心の中では滅びてしまえ！と思っています。

だから、本当は犬のロボットが欲しかったわけじゃない。エディが素直に喜んでるのが妬ましかったです。私が一番大切にされるべきなのによって。

いつもいつももっと欲しい。だから、どんなに大切に扱われても、感謝していません。ありがとう、口では言っても、それはただの挨拶なんです。だって、本当に感謝したら、もうなにもしてもらえない気がするんです。満足してしまったら、そこでもうもらえなくなる気がしています。

だから、いつもまだ足りない、まだ足りないって思おうとしています。私は不当に扱われている。もっと大切にされるべきなのによって、いつも心の中で思っていました。それが間違いなんですね。なんの根拠もないのに、人の好意を当たり前のように要求していました。

マダム

よく理解できましたね。

人に対して、奪いたい心があると、自分が奪われていると感じます。実際は、誰にも奪われていなくてもね。お金の支払い、人と人との間のことのように見えますが、本当はそうではありません。自分の頭の中のエネルギーの使い方が、自分がいくらお金を手に入れられるかを決めています。ネガティブな思い、非生産的な思いは、あなたからエネルギーを奪います。100,000ドル稼いだつもりでも、実際には70,000ドルしかもらえないのは、差別ではなく、あなたの頭の中の破壊的な活動に、エネルギーが使われているからなのです。それを不平等だと思えば、あなたの世界で、また「不平等」が現実化します。これでは抜け出せませんね。

マイラ

なんとなくわかってきました。私は自分の妬みで滅びているんだわ…

(大人のマイラが子どものマイラに話しかけている。子どもの自分の顔がアップになる)

(大人の)マイラ

マイラ！ あなたはたくさんの人に守られているのよ。もっと大切にすると、わがママを言うのはやめなさい。あなたがそうやって人の働きを評価しないから、大人になったあなたは、不平等に扱われるのよ。

そして、誰よりもたくさん欲しいと思うのをやめなさい。実力や働きがないのに、エディよりもトニーよりも良いものをもらおうとするから、不平等を作り出してしまったのよ。

大人になったら、あなたのつくった不平等な世界で生きることになるのよ。

平等というのは、実力や働きによって評価されることよ。

働きに関係なく同じものをもらうことではないのよ。

あなたが人の働きを評価して、感謝する人になれば、あなたの仕事も評価され、実力に応じた扱いを受けられるようになるのよ。そのほうが幸せになれるね？

(しっかりとうなづく子どものマイラ)

END ACT FIVE

ACT SIX

Ext.高級ホテルのパーティー会場。たくさんの人が集まっている。マイラのエミー賞のお祝いのプライベートパーティー。楽しそうに笑っているマイラ。少し大人びた雰囲気になっっている。そこへ、はかま姿のサトルがやってくる。

マイラ

サトル！ ようこそ！ いえ、サトル先生。ようこそ。

サトル

おめでとう、マイラ！ すばらしい賞だね！

マイラ

ええ、マダムとあなたのおかげだわ。

(マイラ、サトルにシャンパングラスを差し出す。そして、二人で会場を歩きながら話す)

私、すっかり謙虚になったし、感謝の心も持てるようになって、本当の意味で大人になったわ！ あ
のとき、私を怒ってくれたおかげよ。今では仕事も心から打ち込めるようになったの。今まではいつ
も人のことが気になっていて、心の中では勝ちたい、勝ちたいって思っていたのよ。それがなくなっ
て、無駄なエネルギーを使わなくなったわ。

この賞は、そのおかげよ。

サトル

勝ちたいと思うことをやめたら、本当の意味で勝てたってことだね。それはよかった。それでこそ、マ
ダムへの恩返しだ。

マイラ

そうね。さ、サトル先生、ここにお座りになって。

(マイラ、サトルのために椅子を引く)

お料理をお持ちするわ。どんどん召し上がってね

サトル

おう！

マイラがサトルに料理を運んで、サトルが勢いよく食べている様子。

END OF ACT SIX